

両者の時代状況の差異もあるが、カフカ以上の存在の苦痛を体験していないだけに安部公房は意識の自由とその実現化を志向する事ができたのである。異端としての罪の意識、ユダヤ人である事からの苦悩は、安部が故郷喪失者である以上に強かったはずである。

安部公房の変身譚にはどこかに現実変革（若しくは反抗）があり存在の可塑性をもつのである。安部は人間が棒に

なるという非現実だが想像力に訴えてくるイメージをもつて仮設の文学を創造したのである。カフカの動物嗜好を感じさせるグレゴールの変身は、人間の故郷喪失とか無益な探求とか逃亡とかいった苛酷な真実を明らかにする夢のイメージからいきなり始まる。メタモルフオーゼは本質的にゆがめられた人間の実存の直喩と現実逃避による救済の象徴である。

良寛——和歌を通して見たその人間像

宮腰 千絵

序

「晩秋がすぎるとみぞれまじりの空模様となり、雪がこいがかはじまる。積雪は県境山地では3m〜4m、栃尾・小千谷・十日町・新井では2〜3m、村上から新潟田・三条長岡・高田にかけて1〜2mにもなる。わずかに新潟・新津・柏崎の海沿いと佐渡が1m以下である。雪崩は初雪と融雪期にしばしば襲う。十二月末から四月中旬まで根雪がある豪雪地帯は丘陵地から県境山地である。雪が消える四

月末には梅と桜が一時にひらき、かわいた山越えのへだしVの風が吹きおろす五月には農家は急にいそがしくなる。」これは、平凡社世界大百科事典による新潟県の《気候》の欄の抜粋である。この新潟（越後）こそ、良寛がその人生の大半を過ごした土地であった。

ところで、久松潜一氏は、『日本文学風土と構成』の中で、「国民生活や文学と季節との関係にしても独自の季節がその国の国民生活や文学に影響を与えるとともに、その国民

生活や美意識によって、季節感を形成してゆくと見られる」と述べておられる。これは全体としての日本文学の特質が日本独自の風土なり気候なりによって決定づけられていることを示すものである。そしてこのことは、同じモンスーン気候帯に属していても、南北に長い地理的条件から、日本の各地方に於ける相違にもあてはめることができるのである。

このように文学というものが、風土や気候と密接に関連しているということは、人間の意識そのものが風土的なものに左右されることを示す。だから、内陸性気候のため、寒暖の差が著しいとは言え、九州の温暖さの中で育った私などには、雪に埋れた長い冬のある北越の生活は想像の及ばない所があるに違いないし、良寛の芸術を、ひいては良寛という人間像を十分に理解することは難しいことかもしれない。しかし、『良寛百考』の著者相馬御風氏の言われる如く、「良寛を説いたり論じたりする人は年々殖えて行く。而も誰一人『俺こそ本当の良寛を説いているのだ』と思わぬ人はなかるう。しかし、本当の良寛はつまるところ客観的には常にどこかに隠れている。百人の人が説けばそこに百人の良寛がある。千人の人が良寛を論ずれば、千人の良寛がある。みんな良寛を説くつもりで実は彼自身を説いている。」のである。例えば同書によると、良寛の死後寢床の下から小判四十枚が出て来たという逸話があり、それを信じる、信じないで論議が分かれていたという逸話があり、これを肯定する立場の人にはそういう風な良寛像がその人

の中にあるのであって、否定する人にはそうではないような良寛像がその人の中にあるからである。

自分以外の人間を、そのまゝの姿で完全に理解するのは所詮不可能なことである。しかも良寛の場合は確かな伝記もなく、信、不信もわからない逸話が氾濫しているのであるから、本来のまゝの彼を知ることが困難である。残された道は、彼の芸術——詩・歌・書、あるいは書簡などから少しづつ想像していくよりないのである。だから私は私なりに一歩でも彼に近付くことができたなら、それで良しとしよう。しかも、漢詩、俳句、和歌、書、それぞれを通して見た良寛像も自ら違つた面を呈するはずである。私はここで和歌を取り上げ、——それはあくまでも彼の一側面しか過ぎないことを念頭に置きつゝ——和歌を通して見た良寛像に探りを入れてみたい。それは即ち、私の中の良寛に出逢うためのひとつの道である。

表 I

| | | | | | |
|------|-----|------|--------|--------|------|
| 6. | 5. | 4. | 3. | 2. | 1. |
| その他 | 旅 | 庵の生活 | 思想的なもの | 人との交わり | 季節の歌 |
| 136 | 44 | 124 | 330 | 348 | 416 |
| (43) | (1) | (11) | (12) | (22) | (24) |

△総数▽長・旋
△そのうち▽

合計 1398首(113)

さて、当論文に於いて底本とした東郷豊治氏の『良寛歌集』（創元社刊）には、総計千三百九十八首（内、長歌・旋頭歌百十三首）の歌が収められている。私はこれを詠まれた素材を基準として、季節、人との交流、内面の世界、日常の生活、旅、その他の六項目に分類した。そしてこの各項目について考察を加えることにより、良寛の人間像を浮彫りにしていくことにする。

本論

△第一節▽ 季節の歌

ここでは、表1による△(1)季節の歌▽に含まれるものを四季に分類し、さらに各季について時候・天文・地理・人事・動物・植物の欄を設けた。尚、不明三首は、歌意不明一首、人事ではあるが季節不明二首である。

表Ⅱ

| | | | | | | | | |
|---|-----|-----|-----|----|----|----|----|----|
| | 6. | 5. | 4. | 3. | 2. | 1. | | |
| | 植物 | 動物 | 人事 | 地理 | 天文 | 時候 | | |
| 計 | 111 | 35 | 26 | 6 | 7 | 19 | 18 | 春 |
| | 47 | 7 | 24 | 6 | 2 | 8 | 0 | 夏 |
| | 187 | 58 | 39 | 23 | 11 | 46 | 10 | 秋 |
| | 67 | 8 | 12 | 11 | 2 | 16 | 18 | 冬 |
| | 1 | | | | | | 1 | 新年 |
| | 413 | 108 | 101 | 46 | 22 | 89 | 47 | 計 |

※ 不明 3首

表からわかるように、最も多く詠まれた季節は秋であり、続いて春、冬、夏の順になっている。特に秋と春が多い。因に万葉集巻八に於いては、春Ⅱ47首、夏Ⅱ46首、秋Ⅱ125首、冬Ⅱ28首（合計246首）であり、古今集では、春Ⅱ134首、夏Ⅱ32首、秋Ⅱ127首、冬Ⅱ20首（春・夏・秋・冬の合計322首）となっていて、平安以降の四季に対する美意識が春と秋に特に集中していたことがわかる。これは久松氏によれば、「調和的な美を重んずる所から」来しているということであるが、良寛もまたそうした日本古来の美意識を受け継いでいたのであろうか。それとも、冬の長い越後の気候的特色から来している面があるのかもしれない。それはこれから彼の歌を詳しく見ていく上で明らかにしたいと思う。

さらに1〜6の項目では、多い順に植物・動物・天文・時候・人事・地理となっている。特に植物・動物・天文が目立つ。これは所謂「花鳥風月」という言葉に集約できるが、この「花鳥風月」と季節感とは密接な関連を有していることを改めて感じさせられる。

以上、大凡の傾向を示したが、次に各季節について詳しく見ていくことにする。尚、各季節ごとに1〜6の項目のうち主な項目を順を追って見ていくことにする。（他は資料を参照のこと）

(1)春の歌△時候▽越後の冬は長く厳しいことは序でも記した通りであるが、良寛の春の歌には、春を待つ心と春の訪れを喜々として迎えている心とが切々と詠まれている。曆の上では春になっても、越後は今だ雪に閉ざされている。

早く里におりて野辺の若菜を摘みたいと指折り数えて待つている良寛。そしてついにやって来た春。彼は次のように歌っている。

(517) 風まぜに 雪は降りきぬ 雪まぜに 風は吹ききぬ
あづさゆみ 春にはあれど うぐひすも いまだ来鳴

かず 野べに出て 若葉も摘まず つれづれと 草の
いほりに こもりゐて うち数ふれば 如月もすでに
半ばを すぎにけらしも

(582) いづくより 春は来ぬらむ柴の戸にいざ立ち出て飽
くるまで見む

(586) 春霞立ちにし日より山川に心はとほくやりにけるかな

(中略)

以上、四季の流れに沿って彼の季節感を見て来たが、ここでまず言えることは単なる風物詠歌ではないということである。それは題詠を嫌った彼の作歌態度からも当然導き出される特色である。その意味で彼の歌は現実的であり、写実的である。良寛の歌をして、生活の歌であると言う所以である。(略)ところで、最初に提示しておいた春と秋についての美意識云々に対する結論であるが、春・夏・秋冬それぞれの歌を眺めてみると、日本人としての伝統的美意識のみに左右されているのではないことがわかる。(略)確かに数の上では春と秋が多いことは先に記した通りである。この点では彼もまた、春と秋の持つ風土的特性——調和的であること——をそのまま美として感じ、歌に詠んだものと思われる。ところが、彼の冬の歌に注目してみ

ると、

(918) やまかげの檜の板屋に音はせねど雪の降る夜は寒くこそあれ

(919) 破れ衣を ありのことごと 着ては寝れ もの山もとの 小笹吹く夜は 寒くこそあれ

(926) 越に來てまだこしなれぬ我なれやうたて寒さの肌にせちなる

というように「寒さ」の語がある歌が、67首の中4首あり、又、「寂しさ」、「心細さ」は計6首見られる。

(900) 日は暮れて浜べを行けば千鳥鳴くどうとは知らず心細さよ

の一首からは、冬の日本海の荒涼たる様子と寂漠さが伝わってくる。このように良寛は冬の歌に於いて、その寒さやそこから来る寂しさ、心細さをもそのまま詠んでいるのである。その意味で、数としての少なさも単に伝統的美意識から来る春・秋の歌の多さの裏返しではないのである。ただ、夏の歌に「暑さ」を詠んだものがないことが指摘できるのであるが、これは越後の気候的特色が冬の厳しさであることから考えると、冬を「寒し」と表現していることにこそ、良寛独自の特徴があると言える。そしてこのことは、前述の如く良寛の歌を自然随順の歌であるとする説をさらに確かなものにする一つの根拠となるのである。

また、春と秋のうちでも彼の場合には春の方により心が傾いていたと思われる。それは長く厳しい冬の後に来る春だからであり、

(933) 今よりはいくつ寝ぬれば春は来む月日よみつゝ待たぬ日はなし

と冬の間待ち続けるのである。さらに、春と秋とを比べたものが三首みられる。(略)これらの歌から、少なくとも恋しく待つという点では、春の方が上なのである。つまり、良寛に於ける季節感には、越後という土地の冬という季節が大きく影響を及ぼしていると言えよう。(以下、第二節——人との交わりから第六節——その他まで省略)

結論

(前略)これらの歌は、良寛を評して「自然を愛し、自然と共に過ごした人であり、出家隠遁の身でありながらも人との交わりを求め、子供の心で生きた人である」とする通説を認めざるを得ない内容を持っている。彼は概して和歌に於いては、このような傾向のものが多し。しかし、これらの歌のみによって、良寛という人物を一言で云々できないことは今まで述べてきたことの各所に現われている。

例えは、

(1050) 世の中をなかに譬へむ弥彦にたゆたふ雲の風のままに
と詠みながらも、老いを嘆き、出家についても自負と反省とが入り交っていたことなどである。又、人々に対する愛着や愛情にしても、次のような歌もあることを見逃すことはできない。

(293) わが庵に人の来るこそうるさけれとは言ふもののお前
ではなし

(996) 晴るるかと思れば曇れる秋の空うき世の人の心見よと
や

(1012) かくあらむとかねて知りせばなほざりに人に心を許さ
まじもの

良寛は、馬鹿正直で、善良で、人を疑うことがない人であったというイメージが人々の頭の中に定着してしまっているが、こういう歌の存在することは私に、ある疑問を抱かせずにはおかない。それは、『良寛禅師奇話』の中の「師常ニ云フ、吾ハ客アシラヘガ嫌也ト。」という一節を見た時にも感じたことである。和歌では人の訪れを待ちこがれ、早く来いと催促している彼が反面、「客アシラヘガ嫌也」と言っているのである。そうすると、良寛という人間は何に對しても二元的な要素を持っていたのではないか。善良さの裏に辛辣さがあり、自省しつつも誇を捨てきれず、つつましやかに生きたよう、けっこう贅沢な面もあったのではないか。

(143) こと足らぬ身とは思はじ柴の戸に月もありけり花もあ
りけり

と詠んでいるにもかゝらず、何かと人に物を依頼した書簡もあるのである。(略)又、自らは禅宗であったが、宗派に對するこだわりを捨て、人々と接し、歌にも他力本願を詠み、無為自然を詠んでおり、宗派を越えた広い宗教心に達していたと言える。しかし、そうだとすれば、なぜあくまでも乞食に執着したのであるうか。水上勉氏の資料(『養笠の人』)によると、良寛の生きた時代は必ずしも平

和ではなく、飢饉や兇作が続いていたことがわかる。そのような時にもなぜ自ら耕することをしなかったのか。歌にも、

(1030) 墨染のわが衣手の ひろくありせば 世の中の まどしき民を 覆はましものを

と詠みつつ、自らは人々の恩恵を受け続けたのである。

しかし、このような疑問も、ともかく人々の施しによって七十四才という高齢まで生きながらえたという事実と、彼の生存中直接交渉のあった、『良寛禅師奇話』の作者解良栄重をして、「師余が家ニ信宿ヲ重ヌ。上下自ラ和陸シ和気家ニ充チ、婦去ルト云ドモ、数日の内、人自ラ和ス。師と語ル事一タスレバ、胸襟清キ事ヲ覚ユ。云々」と書かしたという事実の前には、また違った疑問となってくるのである。つまり、それ程までに人々に仰がれたのはなぜかという疑問である。

ともかく、歌に見た良寛はこれまで私が抱いていたイメージを根底から覆すことはなかった。そのイメージとは、

生涯懶立身 生涯、身を立つるに懶く

騰々任天真 騰々、天真に任す

囊中三升米 囊中、三升の米

爐邊一束薪 爐邊、一束の薪

誰問迷悟跡 誰か問わん、迷悟の跡

何知名利塵 何ぞ知らん、名利の塵

夜雨草庵裡 夜雨、草庵の裡

雙脚等間伸 雙脚、等間に伸ばす

という漢詩に如実に窺うことができる。又、子供と戯れ、人との交わりを求め、自然の中で自然と共に生きた良寛の姿である。

しかし、先に引用したような歌も詠んでおり、そこからこれまで抱いていたイメージに対する微かな疑惑が生じたことも確かである。ただ、歌に於いてだけではそれをはっきりと前面に押出すだけの裏付けはできなかった。

今後機会があれば、他の分野に於ける良寛像からも、この疑惑をさらに深く追求してみたいと思う。